

この作家、この一作

古里 靖彦*

前々回は、「この俳優、この一本」、昨年は「この歌手、この一曲」ということで、映画と歌を取り上げた。となると、次は、本である。時間がある時、陽だまりの中、さわやかな本を読むほど、心地いいことはない。ところで、最近、読書をしていない。時間が無いというか、心の余裕が無いというか、それとも、そのような本が無いというべきか。兎に角、この稿もあと二回となった。それで、ここでは、これまでの読書生活の中で、心に残る、作者のたった一作を取り上げることとする。毎回のことであるが、名作ベストテンではない。ひねくれた少しマイナーな十作である。名作ベストテンなど、作者にとって、大迷惑であろう。別の作家をどうして、比較し、甲乙をつけることが出来ようか。あくまでも、それぞれの愛読者が、好きか嫌いかのことである。従って、この中には、皆さんが聞いたこともない作品が入っていることと思う。私は、読んだ本が、ベストセラーになることはあるが、ベストセラーになった本を慌てて読むことはない。さて……

①夏樹静子『天使が消えていく』(1970年 講談社)

最近、新作を書かれていないようであるが、夏樹さんは、本格推理小説の大家である。どうでもいいことではあるが、一応紹介すると、1938年の東京生まれ、70半ばになられているが、新作を期待したい。このような、オーソドックスな大家の新作が、殆ど、出版されなくなった。昔は、単行本は勿論、カッパ・ノベルスなどで、毎月、新作、名作が出され、適当な価格で読めたもので

あった。例えば、松本清張の新作は、大抵がカッパ・ノベルスで出版された。年末にもなると、新作ラッシュで、数日間の正月休暇に読む本を西船橋の書店で、山のように買い込んでいたものであった。夏樹さんの作品も多くは、カッパ・ノベルスで出版されていたように記憶している。直接関係はなく、又、今回は、取り上げないが、歴史推理の最高傑作、高木彬光の『邪馬台国の秘密』の中に、夏樹静子さんの名前から推理する場面が出てきて面白い。さて……

この一作は、『天使が消えていく』である。この推理小説は、簡単に言えば子育ての話である。子供は、どれだけの深い愛情を持って育てられるのかという話である。主人公は、女性新聞記者で、取材の中で、重篤な病を抱える、幼子とその母親を知る。その親は貧しく、どうみても、我が子に愛情を持っているようには見えない。記者は、何とかその子を守ろうとし、その母親と衝突する。しかしながら……という話である。推理小説であるから、当然、謎があり、最後に、どんでん返しがる。どうやら、作者が、お子さんを持たれたことをきっかけに書かれたようで、最後は、作者に、神が宿ったかのような、鬼気迫るものがある。これは、夏樹さんの、処女作ではないのかもしれないが、世に出た最初の作品である。当然のこと、第15回江戸川乱歩賞の候補となった。結果、森村誠一の『高層の死角』が受賞したが、恒例をやぶり、あまりの傑作故に、夏樹さんの作品も出版され、大ベストセラーとなった。因みに、『高層の死角』も森村絶頂期(初期に、絶頂はおかしいが、森村の絶頂期は、初期である。)の名作であり、一読を勧めるが、私は、敢えて受賞作として比較すれば『天使』の方が、上だと確信している。

2014年11月30日受付

* 江戸川大学 情報文化学科教授 e-ビジネス

嘘は言いません。女性の方は、老いも若きも是非お読み下さい。特に、子育ての方は、是非。それにしても、最近の世相はどうだろう。今朝の新聞にも幼い子の悲劇が載っている。ここで触れるのもおぞましい。あの、柔らかき、思いやりの深い、大和の国の魂は、どこへ消えてしまったのだろうか。

最後に、夏樹さんの主要著作を挙げる。よくあることではあるが、『天使』を超える作品はない。(夏樹さん、独断でごめんなさい。)

以下、主要作品をあげるが、その中では、推理小説ではないが、後の原子力発電所の事故を予測したかのような、又、ノア方舟を彷彿とさせる、『ドーム—終末への序曲』を紹介したい。水爆実験地で幼時に被曝した、若いアメリカ女性が、核戦争が起きても、人類を生き残らせるために「ドーム」の構想を考える。この巨大なドームで千人が生き伸びることができる。それが少しずつ実現に向かっていくのだが、さてその後は…。

主要著作

『蒸発—ある愛の終わり』光文社 1972

『喪失—ある殺意のゆくえ』光文社 1973

『Wの悲劇』光文社 1982

『ドーム—終末への序曲【上・下】』

【加筆・訂正・改題】『ドーム—人類の箱舟』

『見知らぬわが子』講談社 1971

②石原慎太郎『青年の樹』(1959-1960年 角川書店)

今更、紹介するまでもない有名人。何か事あるたびに、ゲームの中の主人公のごとく、復活し、登場する人である。私は、この人の考え方や思想は取らない。だから、詳しく紹介することはしない。この『青年の樹』という作品が好きだけである。これは大変いい。

『青年の樹』の主人公は、坂木武馬。東大に入学、上京した父親と入学式に向かうところから話は始まる。これに、大学の先生と同級生が絡み、政界の汚職事件や旧友の跡目相続問題、学園改革など

様々な出来事に立ち向かっていく筋で、いわゆる青春物といってもいい内容である。坂木武馬という主人公の名前から、石原も坂本竜馬を尊敬しているのだろうか。どうしてこんなに思い入れがあるのかというと、主人公が弱体ラグビー部に入部するのであるが、このメンバーがいいのだ。特に、苦学生の先輩がいい。私は、この本を読んで、大学に入り、ラグビー部に入りたいと決意したのである。残念ながら、ラグビー部には、入らなかったが。

さて、今となっては記憶が薄いですが、実際は、本というよりは、これをテレビ化した作品を見て、そのような気になった方が強いかもしれない。『青年の樹』は、TBSで、1961/06/19～1962/12/24に放送された。主演は、勝呂誉、恋人役の小林哲子が良かった。沖仲仕の息子で友人の和久に寺島達夫、父親が森繁久彌、彼の演じる達之助は、元船長で、いつもステッキを携えている。先生役の徳川夢声、南原宏治、小林の姉が馬淵晴子、その母で高級料亭の女将が、月丘夢路、下宿の女主人が沢村貞子、先輩役の石井伊吉が特に素晴らしかった。しかし、なんとも豪華なメンバーではある。

少し戻るが、本の最後のところ、父親から武馬への遺言が見事で、多少紹介する。

“遺書。汝に希まず。名を成すことを希まず。産を成すことを希まず。権力を握るを希まず。賢しき人間となることを希まず。己を欺きてまで功をとげることなかれ。・・・

己に誠実な人間になれ。妥協のない誠実さで自分と、他人につくす人間となれ。本当の青年となれ。そうしていつまでも青年でおれ。”(引用)

ところで、このような文章を書いた人が、なぜ、今、斯様な過激な発言をするのか誠に謎ではある。

映画は、石原裕次郎で映画化されたが、尺の関係で、武馬と和久役が一緒になった筋立てであまりよくない。唯一、最初の、入学シーンで、滝沢修演ずる学長の入学訓示は素晴らしく、これを聞くだけでもこの映画を観る価値はある。

テレビの主題歌が、中身にやや問題はあ

の、いいので下記する。歌唱は、実にぴったりの三浦洗一さんであった。

【作詞】石原 慎太郎

【作曲】山本 直純

- (1) 雲が流れる 丘の上
花が乱れる 草むらに
ともに植えたる ひと本の ひと本の
若き希望と 夢の苗
空に伸びろ 青年の樹よ
- (2) 嵐すさぶ 日もあらん
憂いに暗い 夜もなお
腕くみ合わせ 立ち行かん 立ち行かん
熱き心と 意気地持て
森に育て 青年の樹よ
- (3) 多感の友よ 思わずや
祖国の姿 いま如何に
明日の夜明けを 告げるもの 告げるもの
我らをおきて 誰かある
国を興せ 青年の樹よ

主要著作

『太陽の季節』新潮社 1956

(1955年 芥川賞, 文学界新人賞受賞)

『狂った果実』新潮社 1956

『青年の樹 1-2』角川書店 1959-1960

『「NO」と言える日本』(盛田昭夫との共著) 光文社 1989

『弟』幻冬舎 1996

③立原正秋『冬の旅』(新潮社 1975年)

立原正秋は、1926年生まれ、韓国出身で、父の病没後、母に伴い日本に定住、小説を書き始める。小林秀雄に師事し、世阿弥の芸術論や謡曲をはじめとする中世の日本文学を学び、創作活動の原点とした。

『薪能』『剣ヶ崎』が芥川賞候補、『漆の花』が直木賞候補となり、純文学と大衆文学の両分野で名作を発表した。鎌倉を愛し鎌倉に住み、鎌倉などをテーマに、能の世界などを取り上げ、静謐で、緊張感のある小説を書いた。

本人も、作品に登場する人物のように、妥協しない性格であったようで、行きつけの魚屋にいったところ、アラを欲する老婆に、主人が投げつけるように与える場面に出くわし、その魚屋からは二度と魚を購入しなかったとか、電車の中の暴漢を厳しくたしなめたとか、エピソードに事欠かない。好ましい。又、桜は、山桜でないといけないという発言もある。なかなかいい。

上記の他、主な小説は『白い罌粟』『冬の旅』『舞いの家』『残りの雪』『夢は枯野を』『冬のかたみに』『帰路』など数多くあるが、タイトルだけでも日本文化の香りが高く、中身が象徴的に表現されている。

その中で、この一作は、『冬の旅』である。これは、1968年5月から1969年4月まで讀賣新聞夕刊で連載された後、新潮社が文庫化し、ベストセラーとなった。

内容を紹介する。

主人公の行助は、母を凌辱しようとした義兄修一郎を刺して、少年院に送られる。本来は、エリートでありながら、少年院での生活を送る行助を中心に、非行少年の生活や友情、或いは、自己との葛藤を描き、若者の厳しい生き様を問う傑作である。最後のシーンがなんとやりきれないが、真偽はともかく、その結末に対し、作者が、飲み屋でサービスを断られたという逸話がある。

これも、やはり、TBSでドラマ化され、大変な反響を読んだ。当時、大変に質の高いドラマを提供した木下恵介・人間の歌シリーズ第1作である。1970年4月16日から同年7月9日まで放映された。行助にあおい輝彦、修一郎に田村正和、重要な役どころの安に松山省二であった。あおい輝彦、松山省二は、はまり役であった。この作品も、私の人生に大きな影響を与えた作品で、当時は、本のみならず、映像の影響がたいへん大きかったことがわかるし、又、映像の質も相当に高か

ったといえる。

本作品には、その原型とも言える作品がある。それは、『美しい城』（1974年 文春文庫）。美しい城とは、少年院のことである。この作品では、より、純粋に少年院の中の生活が書かれている。主人公は、少年院上がりの石見次郎。次郎は、中学の自習中に小説を読んでいたため、体育教師に取り上げられた上、罰を受ける。更に、父親の出自を侮辱され、体育教師の手のひらを短刀で刺す。そして、数ヶ月間、少年院送りとなる。というあらすじである。『冬の旅』よりは、内容がはるかに、自制的であり、より、迫るものがある。立原さんの言からすれば、純文学と大衆文学の違いとも言うべきか、

『白い罌粟』（第55回直木賞受賞作品）や『薪能』、『剣ヶ崎』もいい。題名に惹かれて、わざわざ三浦半島の剣崎（つるぎさき。地名のおこりは、江戸時代、神主が劔を海に投げ海底に沈んだ材木を浮かび上がらせた故事から。）へ行ったが、小説通り、険しい、張り詰めた岬であった。

立原さんの作品は、早くに選集の形で、作品集が出され、これを読んだが、いずれも、凜とした内容の良質の作品であり、読んだ後に、いつも、居住まいを正したい気持ちになる。妥協を許さずということであろう。

主要著作

『剣ヶ崎』新潮社 1965
 『漆の花』文藝春秋 1966
 『辻が花』集英社 1967
 『美しい城』文藝春秋 1968
 『あだし野』新潮社 1970
 『薪能』光風社書店 1970
 『去年の梅』新潮社 1970
 『舞いの家』新潮社 1971
 『果樹園への道』文藝春秋 1971
 『秘すれば花』新潮社 1971
 『渚通り』角川書店 1971
 『作家の旅・日本美の再発見』主婦の友社 1972
 『きぬた』文藝春秋 1973 / 青娥書房 (300部限定) 1973

『はましぎ』新潮社 1973
 『曠野』角川書店 1973
 『夢は枯野を』中央公論社 1974
 『残りの雪』新潮社 1974
 『冬のかたみに』新潮社 1975
 『立原正秋選集』（全12巻）新潮社 1975
 『冬の旅』新潮社 1975
 『ながい午後』光文社 1976
 『夢幻のなか』新潮社 1976
 『紬の里』新潮社 1976
 『春の鐘』新潮社 1978
 『埋火』新潮社 1979
 『その年の冬』講談社 1980
 『冬の花』新潮社 1980
 『空蟬』講談社 1981

④芥川龍之介『手巾』（1916年 中央公論）

芥川龍之介は、1892年生まれ。今更、紹介するまでもない。日本で一番有名な、作家といってもいい。多くの名作があり、枚挙にいとまない。その中で、一作は、『手巾』。ここでそのまま取り上げても良いくらいの、短い小説である。しかし、最初から最後まで一字一句緊張感のある作品で、いわば、心理推理小説の佳品である。

『手巾』は、1916年10月の『中央公論』で発表された。文庫本などでは、あまり、収録されていないので、読んでない方も多いと思う。

少し、あらすじを述べる。

如何にも、芥川の世界らしい風情である。

夏の一時、大学教授の長谷川謹造は、時折、庭の岐阜提灯に目をやりながら、自分の専門とは関係のない、ストリンドベリの作劇術の本を読んでいる。そして、日本の墮落を救済する途は、日本固有の武士道による外はないと論断する。そこへ、ある婦人が長谷川を訪れ、彼の教え子であった学生が、闘病もむなしく亡くなったことを告げる。婦人は、息子の死を語っているにもかかわらず、柔和な微笑みを絶やさない。その時、長谷川は落とした団扇を拾おうとして、膝の上に置かれた、夫人の手元のハンカチが激しく震えているこ

とに気が付くのだ。時間が過ぎ、夜、長谷川はこの話を亜米利加人の妻に語りながら、この婦人こそが武士道なのだ満足げに話す。しばらく満足気な時間がすぎた時、ふとストロンドベリの一節に目が留まる。「それは、顔は微笑してゐながら、手は手巾を二つに裂くと云ふ、二重の演技であつた、それを我等は今、臭味と名づける。……」(引用)。先生のお心の中に、何かそれまでと異なる、不安定な感情が浮かぶ。「先生は、不快さうに二三度頭を振つて、それから又上眼を使ひながら、ぢつと、秋草を描いた岐阜提灯の明い灯を眺め始めた。……」(引用)

これが、美談に終わっていたら、名作にはならないのだろうか。最初読んだ時、この先生が感動した場面で、私も感動したのであるが、今は、少しは、違う感じ方ができそうな気がしている。

芥川の作品の多くは短編である。『芋粥』『藪の中』『地獄変』など、『今昔物語集』『宇治拾遺物語』といった古典から題材をとったものも多い。『蜘蛛の糸』『杜子春』といった童話風の作品もある。が、もう一作挙げるとすれば、『トロッコ』が印象に残っている。

これは、もっと短い小説であるが、内容が怖い。トロッコに興味を持った八歳の良平は、ある日、人の良さそうな二人の工夫にトロッコを押させてもらう。途中の茶店で、菓子をもらったりする。ところが、トロッコは、なかなか元のところへ戻ろうとしない。遂には、夕暮れ方になって、向こう泊まりだから一人で帰れと言われる。途中、我慢に我慢を重ねて、来た道を駆け抜け、ようやく家へ帰り着き、駈けこんだ時、良平はとうとう大声に、わっと泣き出さずにはいられなかった。という話である。これだけだが、怖い。誰にでも経験のある話である。人生、往きより帰りが怖いといことである。“往きはよいよい、帰りはこわい”の「通らんせ」もそう、「夕焼け小焼け」「七つの子」もそう。登山も下山の方が、遭難の危険性は高い。暗くなりかけたら、常に帰りのことを考えなくてはいけない。

人生の生き方か。

⑤武田泰淳『森と湖の祭り』(1958年 新潮社)

武田泰淳さんは、1912年生まれ、戦後派の作家である。主な作品に『司馬遷』、『蝮のすゑ』、『風媒花』、『ひかりごけ』、『富士』、『快樂』などがある。

寺の三男として生まれたそうで、武田さんの作品には、何か、宗教というか悟りの香りがする。特に『ひかりごけ』にはその感が強い。これは、知床岬沖で遭難した悲劇というか、いわば人間の原罪をテーマにした作品である。

武田泰淳さんの作品では、『森と湖のまつり』がいい。題名通り北海道が舞台で、アイヌがテーマの話である。しかし、アイヌの問題というよりは、北海道を舞台にした、雄大なロマン文学として読めばいいと思う。

内容を述べる。

アイヌ統一委員会の池博士に案内されて、アイヌ民族の絵を描こうとする女流絵描き佐伯雪子がアイヌの村をおとずれる中で、様々な人間と出会い、話が展開する。ついには、統一委員会のメンバーでありながら、博士とは行動を異にする、風森一太郎と出会う。一太郎の行動は、誠に荒々しい。池と離婚したツル子や、一太郎の姉でいまはクリスチャンの風森ミツらも登場する。クライマックスは、トウロでの観光開発をめぐる、反対しアイヌを守ろうとする一太郎と、推進する旅館の主人とその息子とが対立し、トウロに全員が集結する。

これを読んだ時、話のスケールの大きさに驚き、兎に角、心を躍らせた記憶があるが、それよりも、塘路(とうろ)や根室標津(ねむろしべつ)といった初めて聞く、如何にも北海道らしい響きに、心が踊った。はて、どのような所なのか。それは、物語の面白さにももちろん関係がある。余談ではあるが、根室の北の方に、興部(おこっぺ)という町がある。中学の友人の親の出身地で、一度行ってみようという話になり、長崎育ちの我が身としては、ワクワクしたものであるが、結局は実現しなかった。未だに、北海道とは縁が薄く、札幌と小樽の裕次郎記念館しか訪れたことはない。

これも映像化されている。何か、映画の紹介のようになってきたが、やはり、いい作品は、映像に向いているというか、なんとか映像化したいという魅力があるのであろう。

東映によって、映画化された。これも当時見てはいるが、私にとっては、原作とは、全く関係なく、活劇の印象が強かった記憶がある。今となって、分かることではあるが、その頃の東映は、以外に多くの真面目な文芸作品を制作している。それを、我々、子供たちが、怪人十面相や風雲黒潮丸と同じような感覚で観ていたのである。

アイヌを守ろうとする風森一太郎が高倉健、女流絵描佐伯雪子に香川京子、身分を隠し一太郎と激しく戦う大岩猛に三國連太郎。一太郎と猛の争いの印象が、あまりにも強かったため、本筋には気持ちが向かわなかったのであろう。それよりも、この映画には面白いエピソードがある。最近亡くなった高倉健さんが、この映画で、全く演技ができず、怒られてばかりで、監督を殴って帰ろうかと思ったとインタビューで答えていたのが、面白かった。監督は、内田吐夢さんである。

主要著作

『司馬遷 史記の世界』日本評論社 1943

『蝮のすゑ』思索社 1948

『流人島にて・ひかりごけ』新潮文庫 1955

『森と湖のまつり』新潮社 1958

『貴族の階段』中央公論社 1959

『富士』中央公論社 1971, 中公文庫 1974

『滅亡について 人と思想』文藝春秋 1971

⑥松本清張『砂の器』（1960年5月17日から1961年4月20日にかけて『読売新聞』夕刊に連載、同年12月に光文社（カッパ・ノベルス）から刊行）

松本清張さんは、1909年の生まれ。この作家も今更紹介するまでもないであろう。歴史小説より作家活動を開始したが、その後、推理小説に重点を置き、名作を連続して発表した。更に、時代物、歴史観を備えた小説、現代史の謎など、幅広い制作活動を展開した。日本の推理小説を文学、

歴史文学にまで昇華させた最大の貢献者である。それまでのいわゆる、横溝正史風のオドロオドロしい推理小説も悪くない。何もしたくない時など、一服の清涼剤であり、私は、横溝正史もエラリー・クイーンも嫌いどころか大好きである。

いわば、清張山脈ともいべき大作品群の中で、一作を選ぶとすれば、それは、『砂の器』である。内容の質の高さ、謎の見事さ、社会性などから最高傑作とっていい。有名な作品であり、今更紹介するまでもないが、少しだけ内容を述べる。

若手の作曲家和賀英良が主人公で、彼の半生の物語である。松本さんの小説の基本は、犯罪が意味もなく行われることはなく、止む無く行われるということである。この意味から、善人が被害者になり、又、犯人の人間性や動機にも重点が置かれる。そのため、社会派推理と言われることもある。この作品もそうである。主人公には、何とか隠したい過去がある。そして、立身した主人公に会いに来た善意の人が、被害者となる。その犯人を、二人の刑事が何度も行き詰まりながら、地道に操作を行い、追いつめていくわけである。そこに犯人と彼を取り巻く人たちの悲しみが、展開が進むにつれて、その密度は高まっていく。その構成力は素晴らしい。それが、人生というものであろう。平凡な日常の中よりは、犯罪の中に人生の本質、滓のようなものが集約される。内容は、これくらいにして、後は、本を読んでもらうしかない。

ここで、映画化された『砂の器』を紹介したい。これは文字通りの名画である。映画と原作を比べてはいけませんが、原作に勝るとも劣らない名作である。橋本忍、山田洋次の脚本、川又昂のカメラが素晴らしい。遠景で、親子が旅をするシーンは、映画史に残る名シーンである。この映像で、本が名作になったといっても過言ではない。刑事役の丹波哲郎と森田健作が素晴らしい。特に、丹波の演技は、彼の映画史の中で最高と言える。別格として、父親役、加藤嘉を挙げたい。刑事と対面し、子供を守ろうとする場面は、子供を思う親心に泣かされる。又、これと似た内容で、水上勉の『飢餓海峡』があるが、この刑事役の伴淳三郎も素晴

らしい。皆さん、双方、必読、必見です。

松本さんの出版物は、勿論、多々あるが、中では、1971年に出された『松本清張全集』が優れている。これで、大抵の作品が読める。清張作品の特色は、短編、中編で、『西郷札』『地方紙を買う女』『坂道の家』『一年半待て』『顔』『声』『陸行水行』など、超名作ばかりである。特に、『陸行水行』は、短編ながら、邪馬台国の謎に迫る逸品である。勿論、『点と線』、『ゼロの焦点』、『時間の習俗』、『眼の壁』など有名長編も素晴らしいのは、言うまでもない。映像化された名作も多いが、中では、松竹の『張り込み』、『ゼロの焦点』、東映の『点と線』を進めたい。これらの作品は、度々テレビなどで再映像化されているが、黒沢作品と同様、オリジナルとは比較すべくもない。このような、愚かな事はやめた方がいい。

主要著作

- 『西郷札』（『週刊朝日』に掲載）1951
- 『或る『小倉日記』伝』（『三田文学』に発表）1952（1953年 第28回芥川賞受賞）
- 『張りこみ』（『小説新潮』に発表）1955
- 『顔』（1957年、第十回日本探偵作家クラブ賞受賞）
- 『地方紙を買う女』（『小説新潮』に発表）1957
- 『点と線』（『旅』に発表）1958
- 『ゼロの焦点』 光文社カッパ・ノベルズ 1959
- 『時間の習俗』（『旅』にて発表）1962
- 『陸行水行』（『週刊文春』に連載）1963
- 『Dの複合』（『宝石』に発表）1968

⑦ 庄司薫『赤ずきんちゃん気をつけて』（1969年『中央公論』）

庄司薫さんは、年の生まれ。庄司薫さんの作品の中から選ぶというよりは、『庄司薫の赤ずきんちゃん気をつけて』を一作としてあげたい。その意味では、この作家、この一作の趣旨とは合わない。というのも、色々ある作品の中で、これがいいというのではなく、ただ、この作品がいいということである。

私が大学生の時に、この作品が書かれた。当時、話題となった作品には、柴田翔の『されどわれらが日々』などがあるが、これは、主人公薫の独白スタイルで書かれた、高校生の日々の話で、堅いものではない。等身大で書かれているが、芥川賞を受賞、私の読書歴で、珍しく、ベストセラーを読む結果となった。電車の中で、この本を読んでいる時、たまたま、主人公の薫くんが、電車の中で涙を流す女性を発見、絶対に自分は、女性を泣かせるような男にはならないと決意する場面に出くわし、涙が流れてしょうがなかった。それ以降この本を薦める時は、電車の中では読まない名作として、薦めることにしている。

『中央公論』1969年5月号に発表。学生運動真っ盛りという時代背景の中で、日比谷高等学校の生徒、薫君が東京大学受験を阻まれ、様々に悩むという内容の話で、それを、上流階級の生活風景と共に爽やかに描いた作品である。当時の重苦しい状況下、実に爽快感のある小説であった。貧乏育ちの私にとっては、薫君の悩みよりは、高級な生活感に、少しねたみを感じたくらいである。同年に第61回芥川賞受賞、ベストセラーとなり映画化もされた薫君四部作の第一作にあたり、『白鳥の歌なんか聞えない』『さよなら快傑黒頭巾』『ぼくの大好きな青髭』と続くが、全て読んだもののそれ程の印象はない。

少し、内容を述べる。

主人公は日比谷高校三年生の庄司薫くんである。彼の日常が描かれる。当然東京大学進学希望であるが、東大入試が中止になる。願書提出期限を翌日に控えて、大学へ行くのをやめるかどうかで悩む。愛犬は死ぬわ、足の親指の爪ははがすわ、ガールフレンドの由美ちゃんとはけんかするわ、散々である。家には友人の小林がたずねてきて、自分の苦悩をさらけただけで帰っていく。電車に乗って有楽町駅で降りて銀座をぶらぶらしていると小さい女の子に遭遇して、少しおしゃべりし、旭屋書店で女の子はグリム童話の本を買う。薫くんはタクシーで帰宅して医者に寄ったあとで由美の家へ行き、大学へ行くのをやめると告げる。

さて、これも映画化され、名作である。学生時

代の混沌とした日々の中、とある一日を通じて高校生の揺れ動く心情を描く。特に、あまり悩みのない、東京の西の高級住宅街に住む、彼には、東映の御曹司、岡田裕介がピッタリであった。相手役の森和代も初々しく役にぴったり。突然訪ねてきて難しい理論を吐く友人小林役の富川徹夫が抜群に良かった。

当時、大学の仲間にこの映画を推薦して、呆れた顔をされたが、その年のキネマ旬報のベストテン上位にランクされ、面目躍如であった。

主要著作

『赤頭巾ちゃん気をつけて』（『中央公論』に発表）1969

（1969 第61回芥川賞受賞、中央公論社より刊行）

『さよなら快傑黒頭巾』（『中央公論』に連載）1969

（中央公論社より刊行）

『白鳥の歌なんか聞えない』（『中央公論』に連載）1970

（1971 中央公論社より刊行）

『ほくの大好きな青髭』（『中央公論』に連載）1975

（1977 中央公論社より刊行）

⑧北村薫『空飛ぶ馬』（東京創元社、1989年）

北村薫さんは、1949年の生まれ。早稲田大学在学中はワセダミステリクラブに所属。卒業後、母校である埼玉県立春日部高等学校の国語教師をしながら、作家として活動した。このため、文学に関する造詣が深く、これが、物語の奥深さを構成している。『空飛ぶ馬』でデビューした。北村さんは、爽やかに読める作家である。その中では、女子大生と噺家の円紫師匠を主人公にした、シリーズをあげたい。これは、四部作とプラス一作よりなっており、何れも優れた小説である。読みやすく、ミステリー入門編にふさわしい。後に、やはり、大評判になった時間をテーマにした四部作があるが、それよりは、この円紫シリーズの方が

優れている。余談ではあるが、円紫さんは、天才、桂枝雀さんを彷彿とさせる。できれば、枝雀さんと剛力彩芽さんで映像化して欲しかったが、今となっては、望むべくもない。

その中で、『空飛ぶ馬』はデビュー作で、人気シリーズの第一弾である。主人公の女子大生が、彼女の生活の中の日常の謎を、探偵役である円紫さんと共に推理し解決するという筋立てである。円紫さんは事件を捜査するわけでもなく、様々な情報や話から真相を推理し解決する。これは、推理小説ファンには、たまらない設定で、探偵が病気になるったり、お年寄りであったりして、このような探偵が現れることとなる。何も大げさな事件がなくても傑作はできるということである。そして、主人公に魅せられて、次から次へと読みたくなること請け合いである。ベッド・ディテクティブとか安楽椅子探偵となどといい、円紫さんは、この延長線上にある。その他で特に勧めは、高木彬光の天才神津恭介シリーズの『成吉思汗の秘密』『邪馬台国の秘密』、アガサ・クリスティのミス・マーブルシリーズなどがある。秋の夜長などにどうぞ。

少し内容を紹介する。

『空飛ぶ馬』は、連作短編集で、不思議な夢の謎、喫茶店の奇妙な出来事、なくなったシートカバー、公園の赤頭巾ちゃん、消えて戻った木馬、がテーマとなっており、どれも日常の謎で、事件などはない。それを、推理しながら解決していく過程が、素晴らしく楽しい。

二作目が、1990年の『夜の蟬』。謎は、第一作と同様、テーマは、日常の不思議で、本屋で逆向きに並べられた本、冷蔵庫に入れられたクイン、歌舞伎鑑賞で姉も前に現れた若い女。『夜の蟬』（東京創元社、1990年）は、第44回日本推理作家協会賞を受賞した。

三作目が、初の長編、『秋の花』（東京創元社、1991年）。

幼なじみ二人の一人が、文化祭準備中に墜落死する。二人の先輩である主人公が、円紫の協力を得て、事件を解決しようとする話である。

その他、番外編の『六の宮の姫君』（東京創元社、

1992年)は、主人公が、卒業論文を書くために、芥川龍之介の短編『六の宮の姫君』の創作の意図を解き明かそうとして、芥川の交友関係を探っていくという筋で、番外編ともいえる作品。この作品は、シリーズの他の作品のように「日常の謎」を扱ったものでなく、文芸上の謎を描いおり。文学推理ともいえるものである。

そして、第四作の『朝霧』(東京創元社、1998年)と続く。

ここでは、ヒロインは、出版社の編集者として社会人となっている。これからもわかるように、このシリーズは、主人公の成長物語でもある。単に、連作推理として読むのは、不足かもしれない。

その他主要著作

時間をテーマとした三部作

『スキップ』新潮社 1995

『ターン』新潮社 1997

『リセット』新潮社 2001

(第141回直木賞受賞)

『鷲と雪』文藝春秋 2009

⑨小峰元『アルキメデスは手を汚さない』(1973年 講談社)

小峰元さんは、1921年、神戸生まれ。1973年『アルキメデスは手を汚さない』で第19回江戸川乱歩賞受賞。これは、高校生をテーマにした長編推理で、この作品は後に多数発表される青春推理小説のスタートとなった。いずれも凝ったストーリーで、推理マニアには、たまらない。この作品を読んで、東野圭吾さんが、推理小説を小説を書こうと決心したということで、やはり、彼の処女作『放課後』は、学園ものの傑作である。やはり、小峰さんのこの一作は、『アルキメデスは手を汚さない』である。

あらすじを述べる。高校2年生の女生徒が亡くなる。彼女は、妊娠していた。そして、死に際に『アルキメデス』という不可解な言葉を残す。父親は、妊娠させた相手と死の謎を求めて、調査を行う。一方、彼女の通っていた高校では、弁当に

毒物が混入される事件が発生。警察が捜査に介入していく。その後も関係者の失踪、殺人などの事件が起き、刑事はいくつもの難題を抱えながら、捜査を続けることになる。

その後の作品を紹介する。いずれも、一作目に続き、興味をそそる題名ばかりである。

まず、『ピタゴラス豆畑に死す』。これだけで、読んでみたくなる。1974年発表の名作推理小説。舞台は奈良県で、登場人物は、奈良県の大物、彦左衛門爺さんとその一族、奈良と大阪の高校生、それに東京から来た男子高校生と女浪人である。この『ピタゴラス豆畑に死す』では高校生と浪人生を中心に変わりゆく日本人の様を描いている。さて、ピタゴラスは、「豆畑」で死んだらしいが、作品では、題名通り、「ピタゴラスの定理」が事件の謎を解く重要なヒントとなっているらしい。勉強しながら、読んでください。

次が、『ソクラテス最期の弁明』。登場人物たちは、より多彩である。東大を目指す高校生、喫茶店を営むもの、芸能プロダクションを切りまわす女子高生など。そこに、元全学連の塾経営者、受験生の息子を心配する刑事、バーのマダムなどが加わり、話が展開していく。不思議な題名の謎は、本を読んでみてください。

次が、『パスカルの鼻は長かった』で、主人公の高校生は作者と同名の小峰元、『ユークリッドの殺人学原論』では、各章のタイトルが面白く、『クレオパトラの黒い溜息』は小峰作品の中でも珍しい試みがなされている。それは横書きで書かれていることで、小説としては日本初であるとのことである。

小峰さんの死後、全ての作品が絶版となっていたが、『アルキメデスは手を汚さない』が2006年に復刊されたことは、誠に喜ばしいことである。

主要著作

『アルキメデスは手を汚さない』講談社 1973

『アルキメデスは手を汚さない』講談社〈講談社文庫〉2006年復刊

『ピタゴラス豆畑に死す』講談社 1974

『ソクラテス最期の弁明』講談社 1975

『パスカルの鼻は長かった』講談社 1975
 『ディオゲネスは午前三時に笑う』講談社 1976
 『プラトンは赤いガウンがお好き』講談社 1977
 『ヒポクラテスの初恋処方箋』講談社 1978
 『イソップの首に鈴をつける』講談社〈講談社文庫〉1979
 『ヘシオドスが種蒔きや鴉がほじくる』講談社 1981

⑩三浦綾子『塩狩峠』（1966年4月から約2年半にかけて日本基督教団出版局の月刊雑誌『信徒の友』に掲載）

三浦綾子さんは、1922年北海道旭川の出身、結核の闘病中に洗礼を受けた。

朝日新聞の懸賞小説に応募して、『氷点』が入賞、作家になった。『氷点』は、新聞に連載され、大ベストセラーとなった。その後、三浦さんは、病気の身ながら、次々にヒット作を出し続けた。

三浦綾子さんの作品は、どれも感動的である。そうとしか表現できないほど、感動的である。登場人物が、全て自己犠牲的で、感動的なのである。宗教人であるからか、宗教を信じるということは、取りも直さず、人のために自己を犠牲にできるかということである。例を挙げると、最初は、『氷点』の主人公、陽子である。彼女は、自分の運命を決して恨んだりはしない。ひたすら善良で人を信じる。次に、どのような目に会おうとひたすら仕事に精を出す、『泥流地帯』の石村拓一、何があろうと神を信じ祈る、『ちいろば先生物語』の榎本保郎、いかなる犠牲を強いられても、運命を甘受する、『天北原野』の孝介、皆そうである。が、中でもこの『塩狩峠』の永野信夫の自己犠牲の精神は、表す言葉が無い。いささか、凡人には脅威で共感出来ず、不愉快にも思える。それでも、実在の人物と実際の出来事をモデルにした小説で、本を読んだ時の感動は表現できない。『人間の條件』の主人公、梶もそうであるが、実際にこのようなことが出来るであろうか。要はそのような心構えで生きるしか、凡人の私には、出来そうもない。

つい最近、三浦さんのご主人が亡くなられたが、ご夫妻のエピソードを聞くたびに、三浦光世さんも小説の主人公のような人であったような気がする。何というか、善のスーパーヒーローである。そして、それを表した、三浦綾子さんは、ヒーローというよりは、ヒーローたちと出会った、その伝承者と言えよう。

この一作、『塩狩峠』のあらすじを紹介する。

塩狩峠（北海道和寒町）は天塩と石狩の国境にある険しく大きな峠である。明治四十二年二月二十八日の夜、急坂の途中で、列車の最後尾の連結器が外れ、客車が猛スピードで後退をはじめた。偶然、乗り合わせていた鉄道職員、永野信夫が何とか止めようと努力するが、何ともならず、最後の時が迫る。彼は、とっさに、線路に身を投げ出し客車を止め、乗客は救われる。という話である。

小説の中なら、まあ、何とか納得するしかないが、これは、長野政雄という人の実話である。三浦さんは、はこの話を長野の部下から聞いた。そして、彼女のテーマである、「熱心なキリスト者」、「犠牲死」の二つをキーワードに月刊誌『信徒の友』に、永野信夫を主人公にした物語を連載する。長野は、当初は、素直にキリスト教を、信じることに疑問を持っていたが、やがて友人吉川の誘いで北海道に渡り鉄道会社に勤めるようになる。片足が不自由なうえに結核に冒されている吉川の妹ふじ子を知ることにより、キリスト教を受け容れるようになる。

このふじ子の姿は、肺結核、脊髄カリエス、直腸癌、パーキンソン病とつぎつぎに難病におそわれながらも、力として作品を書き続けた、三浦さん自身の生き方、姿が投影されている。『塩狩峠』は、そのような中からできた作品である。出版された文庫本のとびらには、新約聖書の一節が添えられている。「一粒の麦、地に落ちて死なずば、唯一つにて在らん、もし死なば、多くの果を結ぶべし」。三浦さんは、自ら、綾子さんのキリスト教への思いと伝道気持ちをこの作品に込めたのである。

我々、凡人としても、彼女の作品を読み、多少でも、感激を味わったからには、三浦さん、光世

さん亡き後、キリスト教は無理にしても、作品の伝道者には、なれないものかと思う。

著作の多くは口述筆記で仕上げられたが、『塩狩峠』はその最初の一冊であったようだ。

少し、三浦さんの生涯について、述べる。

1952年に結核の闘病中に洗礼を受ける。1954年、夫の前川死去。1959年に旭川営林局勤務の三浦光世と結婚。光世は後に、綾子の創作の口述筆記に専念する。

1963年、朝日新聞社による大阪本社創刊85年、東京本社75周年記念の1000万円懸賞小説公募に、小説『氷点』を投稿。これに入選し、1964年12月9日より朝日新聞朝刊に『氷点』の連載を開始する。この『氷点』は、1966年に朝日新聞社より出版され、大ベストセラーとなる。結核、脊椎カリエス、心臓発作、帯状疱疹、直腸癌、パーキンソン病など度重なる病魔に苦しみながら、1999年10月12日に多臓器不全により77歳で逝去。この間、熱心な、プロテスタントの立場から、キリスト教に根差す、薰り高い、作品を世に出し、

多くの人に、多大な影響を与える。

主要著作

『氷点』朝日新聞社 1965

『続・氷点』1971

『ひつじが丘』主婦の友社 1966

『積木の箱』朝日新聞社 1968

『塩狩峠』新潮社 1968

『細川ガラシャ夫人』主婦の友社 1975

『天北原野』朝日新聞社 1976

『泥流地帯』新潮社 1977

『続・泥流地帯』1979

『海嶺』朝日新聞社 1981

『ちいろば先生物語』朝日新聞社 1987

『銃口』小学館 1994

『命ある限り』角川書店 1996 のち文庫

注：本文に引用している要約は、全て、本著者所有の書籍を参照しています。